

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820023

研究課題名(和文) コンテンポラリーダンスの社会的機能に関する研究 - 教育と福祉の観点から -

研究課題名(英文) Study of Contemporary Dance's Functions in the Community in terms of Education and Welfare

研究代表者

富田 大介 (TOMITA, Daisuke)

大阪大学・国際公共政策研究科・特任助教

研究者番号：70623809

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：コンテンポラリーダンス(contemporary dance：現代舞踊)の実践と理論に深く関わってきた研究代表者は、このダンスの社会的機能を「教育」と「福祉」の観点から捉えることを目指した。申請時の前年に受理された学位論文において、このアートの技術(芸術)的特徴を示し得た研究代表者は、その成果をもとに、本研究において、その技術が活かされる社会的な現場を精査し、このアートの様々な機能を検証するよう努め - とりわけ近年増加の傾向にあった福祉分野での機能や、ダンスを必修化した学校体育における機能を考察することで - 現代の文化資本に寄与するコンテンポラリーダンサーの活動とその意義の一旦を明るみに出した。

研究成果の概要(英文)：The principal investigator of this study has personally engaged in the practice and theory of contemporary dance, and has previously conducted a research for a dissertation on this particular subject. Thus, on the basis of the initial findings, author investigated examples with contemporary dancers applying their skills for the development of the community, particularly in terms of education and welfare. Author verified the dance's diverse functions and clarified the significance of contemporary dancers, who can share their talent for the development of these fields and contribute to the cultural capital of the society.

研究分野：人文学(芸術学)

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術学一般

キーワード：コンテンポラリーダンスの社会的機能 (舞踊)教育 (医療・介護)福祉 体性感覚 身体性哲学
身体運動文化論 舞踏

1. 研究開始当初の背景

当時、コンテンポラリーダンスの振付家やダンサーは、劇場で舞台作品を創ったりまたスタジオで生徒に教えたりするだけでなく、学校や病院、福祉施設に企業あるいは大学等でもワークショップを行いその技術を活かしていた。しかしこの芸術(art=技術)の社会におけるそうした様々な働きに注目し、その意義を明らかにする学術的な研究はこの国では未だしの感があった。

2. 研究の目的

上述のこの背景を意識しつつ、先の研究(博士學位論文)で、コンテンポラリーダンスの技術的特徴や価値観を捉えた富田は、本研究において、この技術が活かされている諸々の現場を調査し、その機能の一旦を明るみに出すことを目指した。中でも、本研究の申請年度(2012年度)よりダンスを必修化した学校体育や、近年増加の傾向にあった介護・治療現場などでのそれを勘考し、「教育」と「福祉」の観点から考察に取り掛かることにした。

3. 研究の方法

「教育」の観点から：

(1)主に文献・視聴覚資料の精査を通じて、ダンスが学校での教育等と出会う(歴史的)経緯を調べる。ダンサーと体育教員との関係。ダンスと「女子」との関係、ダンスと「男子」との関係。教育現場へのダンサーの派遣に関する来歴 etc.

(2)学校教育等に携わるコンテンポラリーダンサーの活動について調べる。各NPOおよび財団法人等の調査・事業報告書を渉猟する。フィールド・ワーク(現地調査・現場観察・聞き取り等)を行う。

(3)コンテンポラリーダンサーと教育活動をともにする/したことのあつた学校側の声(教職員・生徒・保護者等からの声)について調査。(2)のと同じ。アンケート etc.

「福祉」の観点から：

(1)主に文献・視聴覚資料の精査を通じて、ダンスが病院や福祉施設での治療や介護等と出会う(歴史的)経緯を調べる。特にモダンダンス、舞踏、コンテンポラリーダンス etc.

(2)障害者や高齢者、子供や子育て中の親、(都市生活に)疲れた者、服役中の犯罪者、被災者に携わるコンテンポラリーダンサーについて調べる。各NPOおよび財団法人等の調査・事業報告書を渉猟する。フィールド・ワーク(現地調査・現場観察・聞き取り等)を行う。

(3)コンテンポラリーダンサーと福祉活動をともにする/したことのあつた施設や団体側の声について調査。(2)のと同じ。アンケート etc.

「教育」と「福祉」の双方に共通して：

(1)海外の資料収集・読解。日本の義務教育におけるダンスの必修化に影響を与えたと思われる、また、健康や福祉にあるいは地域の(再)活性化等にダンスを活かす動きを高めたと思われるイギリスの資料を中心に。また、コンテンポラリーダンスのグローバル化を準備し、ダンスを国の文化資本として築いてきたと思われるフランスの資料を中心に。

(2)コンテンポラリーダンサーと教育・福祉活動をする/したことのあつた学校や施設の方、その関係を紡いだコーディネーターや制作者、そしてダンサーや批評家等を交えた対話型会議を開く(一般の方も参加できる形式で=公開勉強会)。

(3)富田自身による高齢者向け等のワークショップ。

4. 研究成果

文献・視聴覚資料については、特に、NPO法人STスポット横浜のアート教育事業部が製作した事業報告書『アートを活用した新しい教育活動の構築事業 事業報告書2004-2008』や、財団法人たんぼの家発行のハンドブック『言語から身振りへ からだを読み解く:ケアする人のケアハンドブック』、また同じく、たんぼの家制作のDVD『ダンスパフォーマンス「うまれる」』(出演:佐久間新、奥谷晴美、音楽:ジェリー・ゴードン、衣装:堀井拓也)等、重要ながらもこれまで研究者の間で見逃されていた資料を閲覧・入手することができたのは大きい。

フィールド・ワークについては、特に、振付家/ダンサーの砂連尾理が特別養護老人ホーム・グレイスヴィルまいづるの職員やそこに入所するお年寄り等と継続しているワークショップ(「とつとつダンス」)および、かつて白虎社の舞踏手であり現在は介護ヘルパーをしている五島智子が代表を務めるDance&Peopleの諸活動(長岡京市立長岡第三中学校特別支援学級や特別養護老人ホーム洛和ヴィラ大山崎への出張版を含め、振付家/ダンサー黒子沙菜恵のナビゲートのもとに障害者と健常者がダンスの時間を味わう「からだをつかってあそぼ」etc.)に関して、知見を深めた。砂連尾理については、そのワークショップのプレゼンテーション『とつとつダンス part.2 愛のレッスン』のブックレットにおいて、彼の仕事とその妙味を伝える機会を得、また、Dance&Peopleについては、当科学研究費助成期間を終了した後で

はあるが、代表の五島智子をはじめ、長年そのサポートをしてきた振付家/ダンサーの伴戸千雅子等を小職主催の公開セミナーに招くことができ、そのためのやり取りやその打ち合わせを含めて、多くのことを学んだ。

これからの課題については、特に、評価(や成果)の問題が挙げられる。報告書の涉猟とともに、フィールド・ワークの聞き取り等から浮かび上がってきたことは、ワークショップを価値付ける「評価」の問題であった。いわゆる「アーティスト派遣」の意義は、現場に関わる者には多分に認められているものの、その成果を判定する評価を含んだ報告(レポートの作成等)となると難儀のようであった。これは、ワークショップ等に関する評価の仕方が未だ拓かれていないことをも意味する。ある時間と空間に居合わせることで得る感覚やその体験の意味は、定量的な(それは往々にして既存の)評価方式にはそぐわず、また、その評価の仕方を改変しようにも、新たな評価の方法へと向かう言葉や言語活動が多分に不足している状況・状態である。この課題には、数値による定量的な評価とともに、その数字データを活かして抽象・一般化する哲学的思弁力の見直しが必要であるように思われる。数値で「見える化」をするとともに、それを言葉でまとめあげる思弁の力が磨かれねばならない。文が相手に届くかどうかは、その運用の仕方に掛かっており、美学・芸術学の研究者はそこにおいて少なからず貢献できるはずである。

最後に、今後の展望については、「体性感覚」をダンスの視角から膨らませてゆこうと考えている。コンテンポラリーダンスの社会的機能を「教育」と「福祉」の観点から考察して見えた筋は、生ききるための身体知ないし体性感覚、というべきものである。これは自身の企画した3回に渡る公開会議(「ダンスの技術」「踊りと眼」「体性感覚を、知る。’)および為した2回の高齢者向けワークショップ(「健康体操+...「心体操」の話’)からも認識されたことだが、現代の都市生活で眠らされた体性感覚を掘り起こす作業は、多分に力注がれてよいことのように思われる。それぞれのアートは、その素材ないし媒体とそれを知覚するに優位な感覚とが言葉や言語活動において互に絡み合うことで豊かになってきたところもある。ダンスが(視覚以上に)体性感覚にもまつわる言葉で語られるようになる時、ダンスもまた開かれてゆくはずである。そしてまた逆も然り。先ずはワークショップ等でダンサーの口から自然と「今日のワークショップは体性感覚の～」や「体性感覚を　　！」と発せられることを望みたい。また、一言するなら、現在、身体的美学(哲学・感性論)については哲学者が実際に動き始めている(「Somaesthetics」を提唱するリチャード・シュスターマンはその代表だ

ろう)。理論研究と実践研究を両輪にして研究生活を進めてきた富田は、現在のこの流れを今少し太くしたい。そのためにはおそらく、殊この国においては、哲学の先達(中村雄二郎や市川浩等)のみならず、野口三十三や竹内敏晴等、実践タイプの思想家の仕事をも見直すことが肝要だろう。富田としては、その向きの研究に今後意を傾注し、彼らの言葉や思想を咀嚼しながら、「ダンス」ないし「舞踏」と「体性感覚」に関する自身の考えを世に問えたらと期している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計15件)

富田大介、「砂連尾さんのダンスの魅力、について。」、『愛のレッスン』ブックレット所収、14-17頁、2014年3月、一般社団法人torindo、依頼有。

富田大介、「土方巽の心身関係論」、『舞踊学』第35号所収、43-52頁、2012年12月、舞踊学会、査読有。
<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019554869>

富田大介、「ソーマティック・イクスプレッション(Somatic Expression)とは何か」(ジェイミー・マヒューワークショップ報告書)、『美学芸術学論集』第8号所収、106-110頁、2012年3月、神戸大学芸術学研究室、依頼有。
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81003951.pdf>

* その他ダンスレビュー等12件。

〔学会発表〕(計5件)

富田大介、「生存のアルス」、複雑系科学シンポジウム、大阪大学、2013年9月24日。

富田大介、「即興の要件」、日本音楽即興学会招待講演、神戸大学、2012年9月22日。
http://jasmim.net/2012annualmeeting_tomita.htm

富田大介、「習慣の原理についての一考察」第17回舞踊学会例会、立命館大学、2012年6月3日。

* その他シンポジウムやセミナーでの口頭発表2件。

〔その他〕

一般の方々へのアウトリーチ等に関しては、対話型会議(公開勉強会)を3件、ワークショップを2件、行った。

ホームページ等に関しては、
<http://researchmap.jp/dtomita/>

6 . 研究組織

研究代表者

富田 大介 (TOMITA DAISUKE)
大阪大学・大学院国際公共政策研究科・特任
助教

研究者番号 : 70623809